

松山城(金亀城, 勝山城) (国重要文化財, 国史跡, 百名城) (松山市丸之内)

松山市の中心部、勝山（城山）山頂に本丸を構える平山城である。日本三大平山城にも数えられる。山頂の本壇にある天守（大天守）は、日本の12箇所に現存する天守の一つである。この中では、姫路城と同じく、大天守と小天守・南隅櫓・北隅櫓を渡り櫓（廊下）で結んだ連立式で、日本三大連立式平山城にも数えられる。

幕末に建築された大天守ほか、日本で現存数の少ない望楼型二重櫓である野原櫓（騎馬櫓）や、当時の土木技術としては特筆される深さ44mにおよぶ本丸の井戸などが保存されている。敷地一帯は国の史跡に指定されており、建造物21棟は国の重要文化財に指定されている。ミシュランの観光版（ギード・ベール）日本編では二つ星に選定された。

江戸時代

1602年（慶長7年）、伊予国正木（松前）城主10万石の大名であった加藤嘉明が、関ヶ原の戦いでの戦功により20万石に加増され、足立重信を普請奉行に任じ、麓に二之丸（二之丸史跡庭園）と三之丸（堀之内）を有する平山城の築城に着手した。

1603年（慶長8年）10月、嘉明が、この地を「松山」と呼ぶこととし、松山という地名が公式に誕生した。

1619年（元和5年）、武家諸法度違反による福島正則の改易により、幕府の命を受け、嘉明が広島城受領のため赴く。

1627年（寛永4年）、嘉明は、松山城の完成前に会津藩へ転封となり、蒲生忠知（蒲生氏郷の孫）が、24万石の松山藩主になる。

1634年（寛永11年）8月、忠知が参勤交代の途中に死去し、蒲生家が断絶する。そのため大洲藩主、加藤泰興が松山城を預かる（松山城在番）。城在番中に替地の申し出が、幕府になされる。

1635年（寛永12年）7月に松平定行が15万石の藩主となり、以降、松山藩は四国の親藩として235年間続き、明治維新を迎える。

1642年（寛永19年）、創建当初5重であったという天守を、定行が3重に改築する^[5]。

1647年（正保4年）、寛永の鎖国後、長崎に2隻のポルトガル船が入港したため、定行が家臣とともに海上警備に赴く。この時に持ち帰った南蛮菓子の製法が、銘菓タルトの原型とされる。

1703年（元禄16年）2月、松平定直が幕府から江戸松山藩邸での預かりを命じられていた赤穂浪士10名が切腹。

1784年（天明4年）、天守を含む本壇の主な建物が、落雷により焼失。

1828年（文政11年）、藩主・松平定通が文武の振興のため、藩学の拠点として明教館を創設した。

1854年（安政元年）2月8日、時の藩主・松平勝善が天守本壇を落成させる。

1859年（安政6年）5月、勝海舟の設計により、武蔵国神奈川（現在の横浜市神奈川区）に砲台を築造する。

1864年（元治元年）6月、幕府の命を受け、禁門の変に出陣。薩摩藩・桑名藩とともに長州藩と戦い、御所南門などの警備を行う。

1866年（慶応2年）6月、幕府の命により長州征伐に出陣。屋代島を占領するも、速やかに兵を津和地島および興居島に引き揚げる。

1867年（慶応3年）、藩主・松平定昭幕府老中職となる（大政奉還により辞任）。

Wikipediaによる

